

①◆オープニング

2011年3月11日、東日本大震災の大津波をきっかけに東京電力福島第一原子力発電所で4つの原子炉の建物が爆発しました。

この事故によって大量の放射性物質が放出され、それは風に乗って日本中、いや世界中を巡りました。

放射性物質で汚染されたのは福島県だけではないことがわかるでしょう。

この事故で、福島をはじめとする地域がどのようになっていったか、映像で紹介したいと思います。

タイトル

0:56

②◆避難地域の拡大

東京電力福島第一原子力発電所は、福島県の太平洋沿岸、浜通り地方にあります。

3月11日の地震発生後、原発が次々に爆発し、もれた放射能が周囲を汚染していきました。汚染状況が明らかになるにつれ、国による避難指示の地域も次々と広がりました。原発から数十kmの範囲が大きく汚染されて、人の立ち入りが禁止され、福島県によると最大で16万4000人の人々が住み慣れた我が家を離れ、避難しました。

↓

小タイトル 【避難した人たち】

1:47

③◆双葉町斎藤さん

斎藤さんは、福島原発から2kmほどの双葉町で農家を営んでいました。

【原発から2km 双葉町の斎藤さん】

16代、約400年間、先祖代々の田畑を受けついで、コンテストで賞を取るほどおいしいハウレンソウの栽培に打ち込んでいました。

しかし、この原発事故によって、田んぼ、畑、住み慣れた家、そしてふるさとから離れなければならなくなりました。

2:25

《斎藤さん》

(3月11日は開腹手術の翌日だった。) 次の病院の紹介もない。入院していた私は、電気が止められていてエレベーターでが使えないから階段を下りた。原町の相馬市立総合病院の待合室に、普通なら腰かけ椅子があるが、腰かけが全部取り払われて、布団が重なるようになり、地震・津波で被災した人たち、まだ診療待ちの人もあるし、点滴をしている人もいるし、みんなうごめいているわけ。

怒る気にもなれなかった。行く宛てもないまま病院から出されました。私は車がなかったから、息子とやっとメールの連絡がとれて、ちょうど郡山への避難途中の息子家族が私を迎えに戻って来て、車に乗せてもらったのです。

燃料の油もなかった。磐梯熱海の農家の親戚の家に行って、ウチの車は軽油だったので、そこなら何とかかなるかと思い、隣近所から軽油を集めてもらった。そして3月14日に東京に向かったんです。

一番下の娘が東京の江戸川病院にいたので、そこまで行けばなんとかなるかな、と思って。

東京まで16時間かかりました。

4:06 ④◆浪江請戸 【浪江町請戸(うけど)地区】

ここは、浪江町請戸地区。原発の北5 kmほどの地点です。津波ですべての家は流され住民のほとんどは避難しましたが、逃げ遅れた方もいたそうです。元住民の菅野さんによると、原発事故が起きて避難指示が出されたため、立ち入り禁止になり、遭難した方の捜索・救助ががでなかつたということです。

【自宅の跡地にて 菅野さん】

押し流されたがれきの中に、もしかすると助けることができた人もいたんじゃないか、菅野さんは悔やんでいました。

原発事故の特殊なところは、放射能のために通常の救助活動ができなくなることです。

【浪江町請戸小学校】

【請戸小学校にいたこどもたちは、全員が避難して無事でした。】

【3月11日、卒業式のために体育館は飾り付けられていました】

5:14 ⑤◆避難指示区域 3つの区域

放射線量によって避難区域はおおきく三つに分けられました。

だいたい地上から1メートルの高さの線量で、年間50ミリシーベルト以上の帰還困難区域。

20ミリシーベルトを超える居住制限区域。

20ミリシーベルト以下の避難指示解除準備区域です。。

また、避難指示が出ていない地域からも、ご自身で判断して大勢の人々が避難しています。こうした方を含めた避難者の人数はきちんと把握されていません。

6:11 ⑥◆除染と避難指示解除

居住制限区域や避難指示解除準備区域では、放射性物質を取り除く除染作業が進められてきました。

しかし、現実にはなかなか線量は下がっていません。

【個人宅での除染作業】(除染作業の画像)

【庭の除染：表面の土を5 cmほどけずる】

【大型機械を使えないので、すべて手作業】

- 6:14 現在では避難指示が解除された地域が広がっています。
【浪江町にて 2013年8月】
- 6:36 ⑦◆佐藤さん自宅
こちらは富岡町の佐藤さんのご自宅です。
富岡町は震災翌日の2011年3月12日未明に、原子力緊急事態で町民全員が避難するように指示されました。
【佐藤さん宅 富岡町 2015年7月】
- 6:56 《佐藤さん》
あのー、念のためちょっと避難してくださいみたいな放送だったんだよ。だから、みんな サングラだとか 犬をおいて、ちょっとまたどこか集まって、戻るだろうと思ってたんだ。
で、これ、ネズミの糞があって、ネズミの巣になってて、これで帰れるから帰れといって帰るかどうか。
- 7:23 2017年3月、この地域一帯は除染が完了したというので避難指示が解除されました。佐藤さんはかつて原発関係の仕事をしていて、福島第一原発にも出入りしていました。自宅の周辺が放射線管理区域の基準、毎時0.6マイクロシーベルト以上になっていることを知り、とてもここに住むことは出来ないと決断しました。
【 毎時 2.162 マイクロシーベルト】
【放射線管理区域： 毎時 0.6 マイクロシーベルト以上。一般人の立ち入り禁止。飲食禁止。就寝禁止。児童立ち入り禁止。】
【 毎時 1.745 マイクロシーベルト】
【 毎時 2.484 マイクロシーベルト】
- 8:00 2016年、佐藤さんは家を解体したそうです。
- 8:05 ⑧◆村田さんご自宅
ここは、南相馬市小高（おだか）の村田さんのご自宅です。
【 南相馬市小高（おだか） 村田さん宅】
南相馬市では原発からの距離が20kmより内側の地域には3月12日の夜になってから避難指示が出されました。原発の建物が次々と爆発する中でその外側の地域の住民も各自の判断でそれぞれ避難しました。
8:19 【毎時 0.919 マイクロシーベルト】
8:39 【毎時 9.03 マイクロシーベルト】
その後、村田さん の自宅がある小高は避難指示解除準備区域に指定され、住民の帰還を進めるために除染が行われました。
- 8:51 【いぐね（居久根）：東北地方の農家の防風林。】

8:48 《村田さん》

結局、こういう大きな杉の木、これ（家の）北西にある イグネ（居久根）なんです。風よけ。だから、いくら屋根拭いてもらったって、杉の葉が冬になると全部落ちてくるんですね。

今の除染基準だと、家の敷地20メートルの範囲内で、地上から3メートルまでの下枝を落とします、というだけなんです。これは（この家は）、自発的にボランティアの人に落としてもらったんだけど、そんなことやったって上からかぶさっているものだから、ホントに効果は期待できないですよ。

9:30 ⑨◆鴨下さんのケース

いわき市にお住まいだった鴨下さんは2011年3月11日の原発事故直後に、放射線被害を予想してご自分で判断し避難しました。避難指示は出ていませんでした。

【いわき市にお住まいだった鴨下（かもした）さん】

【鴨下さんは、いわき市にある国立福島工業高等専門学校准教授でした。】

【豊かな自然が近くにあることが魅力】

9:50 《鴨下さん》

家族で避難することを決めたのは、（放射能）汚染があったからではなくて、原発が異常・冷やし切れていない、だろうという、原発周辺3キロメートルに避難指示が出るのを聞いたからで、（家を）出てくる時点でまだ汚染は来ていなかった。明確には（放射能汚染は）来ていなかった。その時点では線量計とか持っていたわけではないので、実は来ているんじゃないかとびくびくしながら準備をして出たわけなんです。後の時点で見ると、あのときにはまだ、いわきには明確なもの（放射能汚染）は来ていなかった。3月12日の早朝でした。

非常に自然の豊かな、それが魅力の場所だったわけですから、自然が汚染されているという状況ではやはり、その被害は消えていない。危険は去っていない、ということだと思う。生活空間だけが良くなればいいという問題ではないと私は思っています。

里山に入ったり、海に行ったり、そういう豊かな自然が近くにあるという生活が素晴らしいと思って、いわきで住むことにしたわけです。

11:15 避難している人たちはどんな暮らしをしているでしょう。

⑩◆【仮設避難住宅】

これは、事故後各地につくられた、プレハブ造りの仮設避難住宅です。薄い壁で隔てられたプレハブ住宅は、夏は暑く、冬は寒く、隣の家の声がよく聞こえてしまうような作りでした。事故後7年近く経った2018年現在でも

こうした仮設住宅に暮らしている方が 1万4000人ほどおられます。

【二本松市安達運動公園仮設住宅】

11:55 ⑪◆【いじめ問題】

原発事故で避難している子どもたちのなかには、避難先でいじめにあった子もいます。

「放射能がうつるから、汚い、あっち行け・・・」

「賠償金もらってるんだから、おまえが払えよ。」

などと、いわれている子どものことがニュースになりました。

いじめられていた子の家族は、賠償金はもらっていませんでした。

子どもたちが賠償金のことなど知っているはずはないでしょうから、周りの大人たちが言っていたのかもしれない。大人たちの理解不足がいじめにつながっています。

避難者している人たちは、事故さえなければ友達も居る住み慣れた故郷を離れることなど考えもしなかったことでしょう。避難するということだけでも大変なことだったのではないのでしょうか。自分がもし、避難しなければならなくなったらどうだろうか、と想像してみてください。

13:10 放射線は、ばい菌とは違って人にはうつりません。

原発事故について、放射能のことについて、避難されている方々のことについて、正しい知識を身につけることが必要です。

13:29 ⑫◆甲状腺検査 【協力 放射能市民測定室 たらちね】

これは、こどもたちの甲状腺検査の様子です。

1986年のチェルノブイリ原発事故では、まき散らされた放射性ヨウ素によってこどもたちの甲状腺がんが多くなったと報告されています。日本では福島県だけで、事故の時18歳以下であったこどもを対象に、甲状腺の検査が行われています。その結果、甲状腺がんと診断されたこどもが、通常の数十倍に増えていることがわかりました。しかし政府は放射線の影響は考えにくいとしています。

13:51 甲状腺ガン発症者地図

14:03 【福島県立医科大学放射線医学県民健康管理センターパンフレットより】

14:10 2016年7月、3.11甲状腺がんこども基金が設立されました。福島県内県外をとわず、甲状腺がんになったこどもとその家族のために支援しています。

《崎山》

14:37 【3.11甲状腺がんこども基金代表理事 崎山比早子さん】

これは、甲状腺がんと診断されて、3. 1 1 甲状腺がん子ども基金に申請された方の数です。福島県は73人ですけれども、各県にそれぞれいらっしゃるわけです。こういう、福島県と他県から申請された方の違いはですね、福島県の方はだいたい（甲状腺の）片一方だけとればいいくらいですが、他県から来た人はガンが広がっていて、（甲状腺を全部切り取って）アイソトープ治療をしなければならぬ人の割合が多いということで、やはり、早期発見・早期治療というのが効果があるんじゃないかということを示唆しています。

【福島県の患者 左右二つある甲状腺のうち 片方だけ摘出する】

【アイソトープ治療：ヨウ素の放射性同位体（アイソトープ）を用いた甲状腺がん治療法。甲状腺全摘の患者に用いられる。】

15:34 **【1986年4月26日 チェルノブイリ原発事故】小タイトル**

⑬◆チェルノブイリと福島

1986年4月26日、元ソビエト、現在のウクライナ共和国のチェルノブイリ原発で事故が起きました。

原子炉が暴走し、爆発して、福島原発事故の7倍ともいわれる放射性物質が、ヨーロッパはもとより、世界中にまき散らされました。

【チェルノブイリ原発4号炉】 【4号炉石棺】

15:39 この事故後、放射能汚染の程度にしたがい、避難体制が整えられていきました。年間に5ミリシーベルト以上の被ばくが予想される地域では、人々は強制的に移住させられました。

1ミリシーベルト以上、5ミリシーベルト未満の被ばく地域では、人々は移住する権利を認められました。つまり、移住したいと思う人に政府は新しい住居と新しい生活を提供しなければならないという法律ができたのです。

【ゴーストタウンとなったプリピャチの街】

16:59 放射能汚染による影響は30年以上経った現在でも続いています。人々に様々な健康影響が報告されています。

事故処理にあたったリクビダートルと呼ばれた人たち

この人たちの中にさまざまな健康影響が報告されている。

《崎山》 ガン以外の病気

放射線が体に与える影響としては、一般にガンだけしかいわれていませんけれども、これは、チェルノブイリ原発事故で事故処理をした人たちのデータですけれども、ガン以外に体の中でいろいろな病気を引き起こすということがいわれています。

17:23 これは、ベラルーシ共和国北部にある子どもたちの保養施設、ナデジダです。

【18:05 子ども保養施設 ナデジダ】

【この施設は、日本のNPOチェルノブイリ子ども基金やドイツのNPOの援助が基になって作られました。】

ベラルーシ共和国では、子どもたちの放射線被ばくによる健康影響を少しでも軽くするために、汚染地域の子どもたちを対象にした保養活動が、国の手によって行われています。

このような国立の保養施設が国内に10カ所つくられ、こどもたちは毎年3週間、ここで学校の担任の先生と一緒に過ごします。

保養施設に滞在している間、放射線の少ない環境で過ごし、汚染されていない食べ物を食べ、元気に活動し、体内の放射性物質の量を少なくします。学校の勉強も、保養施設でクラス単位で行われますから、勉強の遅れを心配することはありません。

【17:38 医者がいつもいる医療棟】

【17:43 体育館やジム、ホールがある体育棟】

また、保養施設では、同じように放射線の健康影響を気にかけている同年代の子どもたちに会うことができます。こどもたちはお互いに情報を交換し励まし合う、それが精神的なささえとしても重要です。もちろんお医者さんもいて、一人ひとりのカルテをつくって健康指導を行っています。

19:03 このようにベラルーシでの保養は、医療・教育・こころの三つの柱を大切にしながら運営されています。

19:14 小タイトル 帰還と復興

⑭◆復興政策

今、福島各地では次々と避難指示が解除され、人々をふるさとに戻し、町や村の賑わいを取り戻そうという、帰還復興政策が進められています。住民がふるさとに戻って生活するために除染が行われ、復興に必要な新しい施設が、国の復興資金によって福島県内各地に建てられています。

【19:35 飯坂温泉復興住宅にて】

また、福島県内のエネルギーを再生可能エネルギーで100%まかなうことを目標に、太陽光発電や風力発電の導入が進められています。

【19:38 飯舘村太陽光発電施設】

【19:44 南相馬市・松川浦の大規模ソーラーファーム】

【19:48 南相馬市・万葉の里風力発電所】

20:05 ここはコミュタン福島：三春町につくられた、福島県環境創造センター通称「コミュタン福島」 福島県内の小中学生が全員が、ここに来て、放射能や放射線、環境・エネルギー問題について教わります。

【コミュタン福島：福島県立環境創造センター】

こどもたちに放射線被ばくの危険性をきちんと教え、日常生活の中で被ばくを避けるくらしかたについて、具体的に学ぶことができるような展示が充実するといいですね。

20:44 ⑮◆ 小タイトル 避難指示解除基準をめぐって

避難指示が解除される基準は、年間 20 ミリシーベルト以下になりました。もともとは年間 1 ミリシーベルト以下だったので、この基準についても様々な考え方があります。

福島県が発行している「健康サポートブック（H25 年版）」には「原爆被爆者の調査では、100 ミリシーベルト以下ではリスクの上昇は科学的には認められていません。」と書かれています。

21:31 一方で、2011 年 5 月にこの基準が学校の除染基準として発表されたとき、内閣官房参与という役職で福島の放射線問題に取り組んでいた放射線の専門家、小佐古敏荘氏は「この基準は高すぎる。私の子どもをそういう目に遭わせるのは、私は絶対にいやです。」と抗議して、参与を辞任しました。

【内閣官房参与 小佐古敏荘氏 抗議の辞任】

つまり、低い線量でも被曝すればそれに応じたリスクはあるので、なるべく被曝は少なくするべきだ、という考え方です。

しかも、国際放射線防護委員会 ICRP の勧告では、年 20 ミリシーベルトというのは原発事故などの緊急時の基準です。

平常時の基準は年間 1 ミリシーベルト以下です。

福島でも除染して年間 1 ミリシーベルト以下に近づけると政府は言っています。

22:51 ⑯◆ 各地の取り組み

I 飯舘村菅野村長

様々な考え方がぶつかり合う中で村の復興をどうするか、実際に実行する立場にある飯舘村の菅野村長に話を伺いました。

23:07 《飯舘村 菅野典雄村長》

この原発事故・放射能の避難というのは、まさに他の災害とはまったくちがう、異質のものだということを、痛いほど思い知らされているということでもあります。百人百様だということですね。色も影もかたちも臭いもない、というものに対するいわゆる不安感、あるいは放射能というものの本質をほとんど日本人は勉強し

てこなかった、という、私も含めてですけども、ということですから、百人百様です。危ない危ないっていう方も、その人にとっては正しい。大丈夫っていう方も、その人にとっては正しい。ですから普通は目に見えていたりんだりしますから、違いがあっても 90 度ぐらいの角度ですから、まさに百人百様、180 度、ばあいによっては 360 度とっていいかもしれませんから、その中で物事を決めていくということというのが、とてつもなく大変だっている話です。

24:12 Ⅱ 福島市：吉野さんの取り組み

これは「ホットスポットファインダー」という機械で子どもが通学する道の放射線量を測定している様子です。測定しているのは、福島市で子ども達を放射線被曝から守る活動をしている吉野さんです。

「ホットスポットファインダー」は、高さ 10cm、50cm、1 mの放射線量継続して測定し、動画といっしょに地図上に自動的に記録する機械です。これを使うと、通学路や公園の放射線量が高い場所、ホットスポットかわかるので、その場所を避けることができます。実際に、公園などでホットスポットを見つけ、警告板を設置したり、除染したりすることに役立っています。

25:15 Ⅲ 相馬農業高校の取り組み

相馬農業高校の高校生たちは、原発事故の影響を受けたふるさとを何とか復興させたいと、いろいろなプロジェクトにチャレンジしています。

汚染された農地で菜の花を育て、放射能を除去するとともに菜種油をつくる「菜の花プロジェクト」 【 菜種油 油菜ちゃん 】

海辺に育つハマナスからつくったジャムやハマナスティーを特産品に育てる「ハマナスプロジェクト」などです。

【 ハマナスジャム 】【 ハマナスの花びら 】

25:50 《相馬農業高校生徒》

まだ、福島イメージってそんなに良くないと思うんですね。放射線のこととかもあって、偏見とかもいろいろなところからもたれてたりすると思うので。今の現状を都会の皆さんに伝えて、南相馬の良さをアピールしたいと思います。

私は、南相馬市で元気にやっていますっていいたいですね。別に放射線で困ってたりもしてないし、私たちはそれを、放射線があったから残念だったねって思われるより、私たちは放射線があったからそれをチャンスに変えて私たちは頑張っています、ということ。

26:38 Ⅳ：福島県の南部 エスペリ

田村市で以前から無農薬野菜の産直販売を営んでいた大河原さんは、エスペリという産直販売の店を 2013 年にオープンしました

【 大河原さんご夫妻 】

テロップ【福島県知事 佐藤 雄平氏】

26:54

《大河原さん》

うちのお客様が50~60件、郡山中心にいたんですが、お店はなかったんです。私たちにはお店を作るという考えもなかったんです。もうちゃんとお客さんがいらっしやいましたし、自宅が明治9年に建った古民家なもんですから、そこをいろいろ直して、グリーンツーリズムとか、農家民泊みたいなことをやりたいなーって希望はあったんです。でも、お店持とうというような気持ちは、震災まではなかったですね。お金もないのに何でそんな店を建てることにしたのかっていうのは、やっぱり夫が言ったように、悔しかったからです。それと、放射能をちゃんと表示して販売する店っていうのが欲しかったんです。

私は、チェルノブイリの後でヨーロッパは皆さんベクレルを測って、そういうものを気にしながら食べて、ドイツだったら一日の内に大人は8ベクレルを超えないように、子どもは4ベクレル超さないようにしましょうっていう国の取り決めができたし、日本も私はすべての商品のそばに、ベクレルが表示されるような世の中になるんだろうと思ったんですよ。

ところが、当時の（福島県）佐藤雄平知事は"大丈夫です"っていうだけで、（ベクレルの）数字は一般の人にはなかなか簡単には見られるような仕組みにはなっていないかったです。

だったら、自分たちは誰が見ても、まあセシウムだけですけれども表示できるのは、その数字と、栽培履歴ですね、農薬を使っているか使っていないか、使っているとしたらどんな農薬なのか。そういうものを、おじいちゃんでもおばあちゃんでも、ぱっと見ればわかるようなお店を建てたいと思った。

29:00

V：原発訴訟

被害を受けた多くの人々が、東京電力と政府に対して福島原発事故の責任をとるようにと裁判に訴えています。放射能汚染によって奪われた家や畑、仕事や地域のつながり、豊かな自然、元のままのふるさとを返して欲しいと訴えています。

【 2017年10月10日福島生業（なりわい）訴訟判決 福島地裁 】

クリエイティブ・コモンズ表示ライセンス（再利用を許可する）

29:27

⑰◆ 帰還復興と 避難する権利

福島の復興のために 2016年12月、復興加速化指針 が策定されました。

「早期帰還支援と新生活支援の両面で福島を支える」とうたわれています。しかし、地域の将来を担う子どもたちがほとんどふるさとに戻ってきていません。

29:58

《飯舘村菅野典雄村長》 インタビュー

若い人と子どもが帰らない、ということです。残念ながら、他の災害だったら"なに言ってんの!" と言って、首に縄つけて帰っておいでよっていう話もできますけれど、この放射能のことは、それを一切言えない、やってはいけない、それぞれどんな考えしようとも、その人の判断は正しい判断ですから、それが他の災

害とは全く違うということ、痛いほど思い知らされたということでもあります。

30:37 2012年6月、全ての国会議員が賛成して「こども被災者支援法」が制定さ

「支援対象地域での居住・他地域への移動・帰還を
自らの意思で行えるよう、いずれを選択しても適切に支援」
「放射線による健康上の不安が早期に解消されるよう最大限の努力」

この法律では、避難する権利がみとめられ、
できる限り被ばくを避けるくらしが目標になっています。。

30:56 日本各地で民間の保養活動に取り組んでいるグループがあります。

【 東白川郡鮫川村 あぶくまエヌエスネット 】

ここ、福島のア武隈山地の鮫川は、以前から自然教室が行われていましたが、
奇跡的に放射線量が低く、現在ここは「フクシマキッズ」という保養活動の
拠点になっています。

外遊びが制限されている福島県内の各地から子どもたちがやってきます。
ここで できる限り放射線被ばくを避ける生活をし、元気に遊んで、健康な
身体をつくっています。
これからもこのような活動に、国や自治体からのさらなる援助が必要です。

31:45 ⑱◆若者たちのボランティア活動 被災者の心のケア

原発事故後の福島について、学んできた私たちには、どんなことが出来る
でしょうか。

ここは、原発事故で避難してきた人たちが暮らす復興住宅です。
福島大学の学生たちのボランティア活動です。

【 福島大学災害ボランティアセンターの学生と
飯坂温泉復興住宅のみなさん 】

ふるさとの家やコミュニティーを離れて暮らすお年寄りを相手に、
話をしたり、ささやかなパーティーをしたりする活動を、定期的に行っています。

今の課題は、避難して復興住宅に暮らしはじめた方々と、
復興住宅の周りの住民たちとの新しいコミュニティーをつくることだそう
です。

新しい住民である避難の方たちと、元からの住民の方たちがわきあいあいと暮
らす、そんなまちづくりを 学生たちのボランティア活動が支えています。

32:49 ⑱◆ エンディング 放射能災害と私たち

みなさん、福島の今の様子を少しでもわかっていただけましたでしょうか？

ご紹介したのは、おもに2017年12月までの様子です。

原子力による災害は、放射能が目に見えないという点、
また、影響が消えるまでに長い年月がかかるという点で、ほかの災害とは
異なっています。

放射能災害によってふるさとを離れなければならなくなった人、
ふるさとに住み続けて新しい道を歩み始める人、、、さまざまです。
そして、災害を受けた地域をどのようにしていくかというのも、人それぞれの
思いがあることでしょう。

33:48 【 福島原発告訴団団長 武藤類子さん 】

《武藤類子さん インタビュー》

「自分の頭で考えるということを私たち自身も放棄してはいけないと思っている
のですよね。

この原発事故の中、こんなにもすごい政策とか宣伝とか、そういう中で押し流
されていってしまうけれども、そこで自分の頭で考えながら そこに何とか巻き
込まれない、あらがう、立てる自分というものをつくる。

だからもう大人は無理かもしれないけれど、子どもたちをそういうふうに私たち
は育てるといえるのか、おこがましいけれど、そういう生き方をしていってもらう
という責任が私たちの中にはあると思っています。」

34:42 放射能で汚染されたのは福島だけではありません。

放射能に関する問題は、これからも長く続きます。

このような状況を少しでも改善し、二度と繰り返さないためには、
どうしたらよいか自分の問題として考えてみてください。

【ご視聴、ありがとうございました。】